

桜蔭俳話会 通信句会(第一一一回 平成二十五年度秋)

高得点句 自句自解

十四点

④ 閉めし戸をまた開けてみる良夜かな

小川名梅乃

この一句を成した場所は、私の寝室でした。ベッドを整えて雨戸を閉めようとした時、全面が輝いて円く見える月に遭遇しました。朧朧と輝く満月にしばし見入っていました。雨戸を閉めてベッドに入りましたが、強烈な思いが、もう一度雨戸を開けさせました。しばしの間、今宵の月を楽しみました。

九点

① 草の実のかすかに重き揺らぎかな

柏尾のり子

秋の晴れた日に、道ばたの雑草を見て、雑草にも穂のように実がつくのだと思い、句にしてみました。

八点

② 行く道を照らすに足らぬ二日月

安中 忠夫

さる会合の帰り道、それほど遅くはなかつたが、大通りから住宅街に入ると、街灯も乏しくあかりが頼りなく感じる場所があつた。見上げると極細の二日月が照るだけだつた。そんな情景を詠みました。

① 中仙道暮色になしむ吊し柿

稲葉 幸

日帰りで中山道を歩いて来ました。長野新幹線(佐久平下車)利用で足が近くなりました。望月宿までは、駅よりバスで二十分、茂田井、芦田宿へは、田甫の畦道も歩き乍ら先を急ぐ。茂田井の宿は江戸時代の面影の残る民家や造り酒屋が軒を連ねていました。霧除に縄を張り柿がズラリと干されていました。「なしむ」というか融け込んでいました。茂田井は、皇女和宮様降嫁の折、万余の大行列が通った街道だそうです。

七点

② さわさわと秋の声聴く竹の寺

藤本 友子

鎌倉の報国寺の竹林で作った句です。秋の竹林は、他の季節と違い、葉擦れの音なども妙に寂しい気分にさせます。「さわさわ」というオノマトペを用いて秋の雰囲気を出したいと思いました。

①この種を植うると葡萄食む子かな

柏尾のり子

ぶどうは孫の大好物です。このころは種のないぶどうを食べることが多いのですが、大きな種のあるぶどうを食べた時の孫の一言が、俳句になりました。

捨案山子谷間の薄日仰ぎをり

佐渡谷秀一

晩秋のある週末、特急あすまで松本まで出掛けたときの車窓風景である。稽田、残っている稲架や稲束。たわわな柿の木。山あいの田畑。そして鳥害予防の祈りのような案山子。都会暮らしには、心安まる光景。余談だが、家の外へ出ることが叶わない義母は、毎日、庭に米を撒き、雀が寄るのを楽しみとしている。